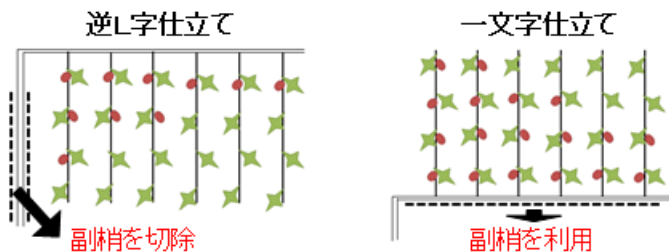


パッションフルーツ夏実の収量向上のための 仕立て方法および基肥一発施肥方法の確立

岐阜県では冬季の気温が低く、露地におけるパッションフルーツの栽培が困難であり、挿し木苗を4~5月に定植して12月まで収穫する栽培が行われています。パッションフルーツは夏季の高温期に花芽が着生しないため、本作型では6~7月と9月に開花し、果実は8~9月（夏実）と11月以降（冬実）に収穫しますが、夏実は樹体の生育が十分でないため開花数が少なく収量の低いことが課題です。そこで、夏実の収量向上を図るため、仕立て方法および基肥一発施肥方法を確立しました。



仕立て方法(左:逆L字仕立て, 右:一文字仕立て)

初期に発生する副梢を主枝上に伸ばし、それに着生する花芽を利用する

窒素施用量と施肥資材が開花数、収量および果実重に及ぼす影響

試験区 (施肥資材)	窒素施用量/樹	開花数/樹 (花)	収量/樹 (kg)	果実重 (g)	肥料代/樹 (円)
IB化成	210g	53.0abc ²	3.1ab	83.6	340
	140g	51.5bc	3.0ab	86.0	227
	70g	54.0abc	2.4bc	75.0	113
LPコート100+IB化成 ¹⁾	210g	70.4a	3.7a	81.5	230
	140g	63.5ab	3.6a	81.1	153
	70g	41.0c	1.8c	74.7	77
分散分析 ²⁾	施肥資材	ns	ns	ns	—
	窒素施用量	**	**	**	—
	交互作用	**	*	ns	—

²⁾Tukey-Kramerの多重検定により、同一列の異符号間に5%水準で有意差あり (n=4~5)

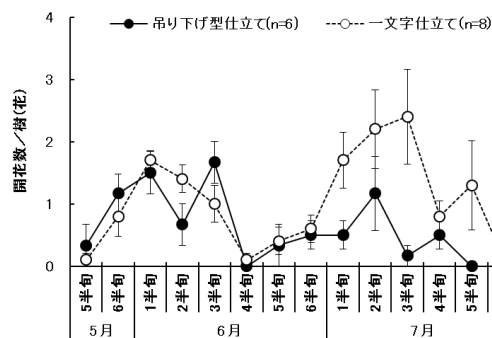
¹⁾LPコート100とIB化成の窒素施用量の割合は50:50

²⁾二元配置分散分析により、**は1%、*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし

施肥資材の割合が開花数、収量および果実重に及ぼす影響

試験区 (LPコート100とIB化成の窒素施用量の割合)	開花数/樹 (花)	収量/樹 (kg)	果実重 (g)	肥料代/樹 (円)
LPコート100:IB化成=90:10	51.8	3.2	81.9	95
LPコート100:IB化成=75:25	50.5	3.3	86.6	117
LPコート100:IB化成=50:50	51.5	3.4	79.1	153
分散分析 ²⁾	ns	ns	ns	—

²⁾分散分析により、nsは有意差なし



仕立て方法が開花数に及ぼす影響
(窒素施用量50g/樹)



パッションフルーツ果実

(研究成果)

- ・開花数は一文字仕立てが逆L字仕立てよりも多くなりました。
- ・収量および果実重は窒素施用量210g/樹と140g/樹が70g/樹よりも優れました。また、施肥資材の組み合わせによる収量および果実重の差は認められませんでした。
- ・肥料代や作業性を加味すると、窒素施用量は140g/樹、LPコート100とIB化成の組み合わせ割合9:1が最も実用的であり、本施肥方法による一文字仕立て栽培の夏実の収量（栽植密度：株間2.5m×列間2.5m、160樹/10a）は約0.6t/10aとなりました。